| 群教セ | F09 － 01 |
| --- | --- |
| | 平15.217集 |

# 校内の支援体制を構築する工夫

## ── 組織化した教育相談活動を通して ──

特別研修員　　田村　邦宏　(群馬県立伊勢崎東高等学校)

《研究の概要》

本研究では、組織化された教育相談活動を行うために、情報の収集と共有化を図る会議の持ち方について実践と考察を試みた。会議で援助シートを活用することによって、学校不適応生徒の情報を的確につかむことができ、方針を立てることができた。また、コンサルテーション会議によって校内の援助者が「援助チーム」として協働し、より良く校内の支援体制を構築することができ、有効な援助サービスを行うことができた。
【キーワード：教育相談　高等学校　援助シート　援助チーム　支援体制】

### Ⅰ　主題設定の理由

本校における生徒への指導・援助は、これまで、個々の担任に任されてきた。今年度はスクールカウンセラーが配置されたが、当初は担任や保護者の依頼によって、スクールカウンセラー(以下 SC と記述)が個々にカウンセリングを行っていた。このように、校内の援助者が協働する組織的な支援体制が十分ではなかった。

援助サービスの質を向上させるには、複数の援助者が「援助チーム」として協働することが有効であると言われている。コンサルテーションを通した援助サービスの実践とその蓄積を通して、校内の支援体制を構築することが求められている(石隈，2002)。

このことを踏まえ、本研究では、会議を開き、そこで情報の収集と共有化を図ることが重要だと考えた。情報収集シートを始めとする一連の援助シートを使い、SC と養護教諭を含めた教育相談係の会議を行うことによって、学校不適応生徒の情報やニーズを的確にキャッチして集められれば、援助ニーズの大きい(特定の)生徒が焦点化され、方針や対策が立てやすくなる。

方針を立てていく中で、校内の援助者の行う支援の動きが具体化できれば、「特定の生徒の援助チーム」が組織化され、それまでの会議が単なる情報交換の場からコンサルテーション機能を持たせた会議となり、問題解決型の支援と共に、学校不適応等の生徒の問題に対して予防的に機能する活動が展開できると考え、本主題を設定した。

### Ⅱ　研究のねらい

情報収集シートを始めとする一連の援助シートを使って、情報を効果的に集め、共有しながら方針を立てることによって、コンサルテーション機能を持った会議が開かれ、校内の援助者を援助チームとして組織化すれば、より良い校内の支援体制が構築され、生徒に効果的な援助サービスができるであろう。

### Ⅲ　研究方法

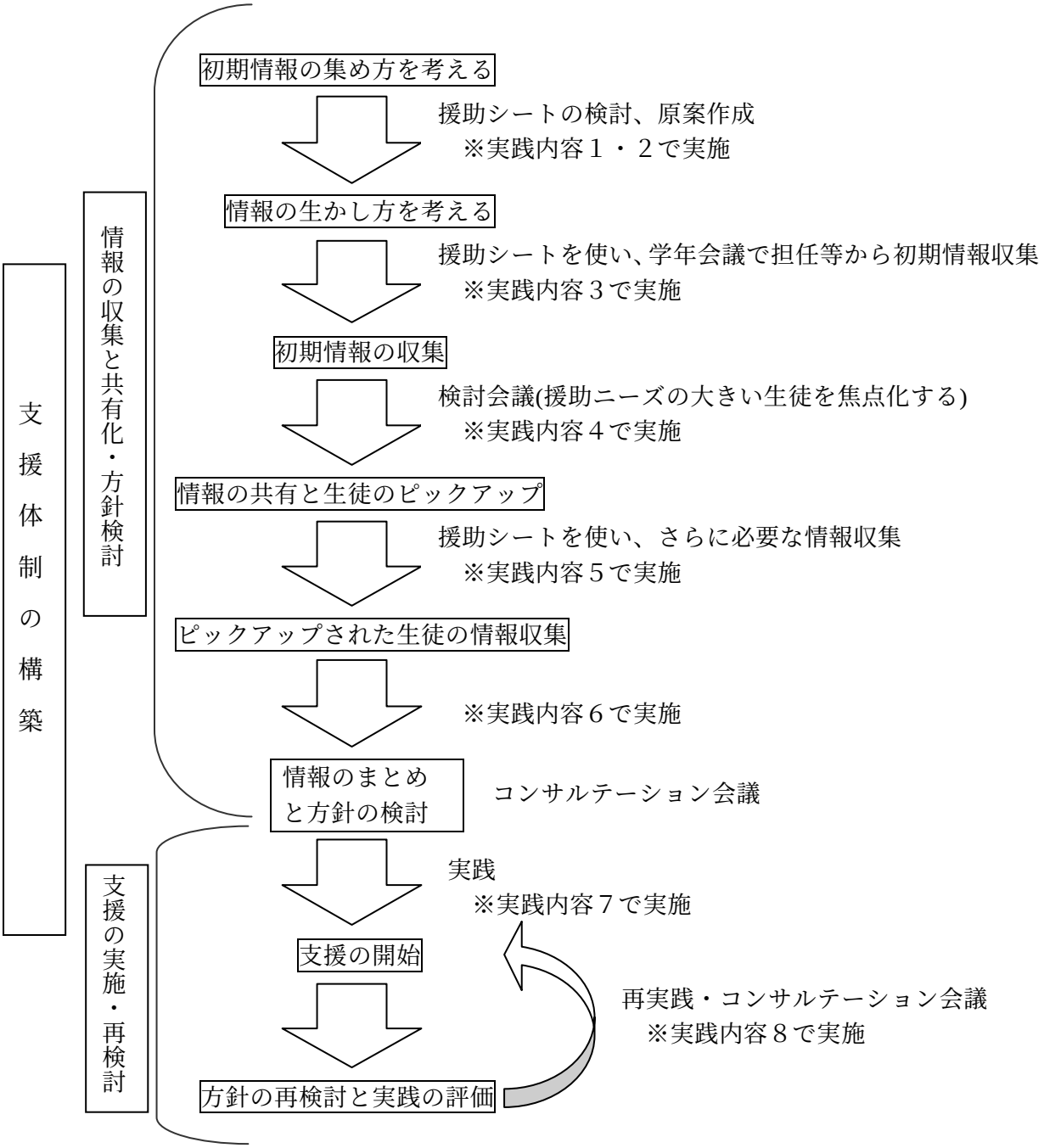
**1**　援助シートを作る

2　情報の動かし方について考える

3　会議を実施し、情報のまとめと方針の検討を行う

4　方針の再検討と実践の評価を行う

## Ⅳ　研究計画



## Ⅴ　実践内容と結果

| 実践内容 | 実践の結果 |
|---|---|
| **1　初期情報の集め方**<br>(1)　情報収集シートの作成(資料 1)<br>(2)　生徒理解シートの作成(資料 2)<br>(3)　教育相談シートの作成(資料 3) | 情報収集と共有化を図ることをねらいとした一連の援助シートの原案を考え、生徒指導部の先生方に相談しながら作成した。 |
| **2　情報の生かし方**<br>(1)　教育相談係会議シートの作成(資料 4)<br>(2)　支援シートの作成(資料 5) | 一連の援助シートを作成すると共に、係が主体となって支援体制を構築していく姿勢を示していった。 |
| **3　初期情報の収集**<br>学年会議にて不適応生徒の情報キャッチ<br>○　これまで、各クラスの生徒の動向は報告されてきているので、気になる生徒(特に学校不適応の生徒)がいれば、報告してもらうようにお願いした。<br>○　学校不適応生徒への対応を、教育相談係が主体となって行っていくことを知らせた。<br>○　各学年担当の教育相談係が、情報収集シートに記録することによって、その後の会議資料に役立てた。 | 定期的に行ってきている学年会議で情報収集シートを使い、初期情報を収集した。<br>**別室登校をしている生徒だけでなく、担任から見て気になっている生徒の情報が出てくるようになった。また、学年の先生方からも、気になる生徒の情報が出てくるようになった。**<br>**教育相談係の活動について、担任の先生方から、助かるので是非お願いしたいとの声があった。** |
| **4　情報の共有と生徒のピックアップ**<br>(1) 教育相談係会議にて情報の共有(検討会議)<br>○　係の会議には、養護教諭、SC も出席して情報交換を行った。<br>○　各学年担当の教育相談係が、学年会議で出された生徒を報告した。<br>○　養護教諭が保健室利用者の中で、気になる生徒(学校不適応生徒)を報告した。<br>○　SC が相談室の利用状況を報告した。<br>(2) 教育相談係会議にて生徒のピックアップ<br>○　援助ニーズの大きい生徒や、担任が対応に苦慮している生徒をピックアップした。<br>○　ピックアップした不適応生徒への組織的な支援を行うために、当面何ができるか検討を行った。 | 教育相談係会議を定期的に開催し、そこで、教育相談係会議シートを使った。<br>係会議を立ち上げた際、生徒への対応は、担任と連携しながら係が動いていくことが確認された。<br>**各学年から学校不適応傾向があると思われる生徒の情報が寄せられ、係で情報の共有化ができた。**<br>**係会議の中で、養護教諭から保健室によく来室する生徒の情報が出され、係が動いていくことが確認された。**<br>授業になかなか出られず、早退を繰り返す生徒がいるので、その生徒への援助のあり方を今後検討していくことにした。 |
| **5　ピックアップされた生徒の情報収集**<br>(1) 生徒の情報収集<br>○　教育相談係(研究者)が該当する生徒に会い、生徒理解シートに記入してもらった。<br>○　生徒との面談を通してニーズをつかんだ。<br>(2) 担任のニーズをつかむ<br>○　教育相談係(研究者)が該当する担任に教育 | ここで、生徒理解シートと教育相談シートを使い、さらに必要な情報を収集した。<br>コーディネート役として研究者がその生徒についての情報収集を行い、担任と連携した。<br>生徒理解シートは、当初、担任に書い |

| | |
|---|---|
| 相談シートの記入をお願いし、担任のニーズの把握に努めた。 | てもらう予定であったが、生徒の良い面を書いてもらうのは、担任でも分かりにくいという指摘があったので、生徒本人に書いてもった。 |
| **6　情報のまとめと方針の検討**<br>(1) 情報をまとめる<br>○　教育相談係会議の中で、教育相談シート・生徒理解シートを参考に、これまでの生徒の様子と指導経過をまとめた。<br>(2) 方針を立てる(コンサルテーション会議)<br>○　生徒の様子と指導経過を基に、係会議でアセスメントを行い、援助目標や指導方針を立てた。<br>○　係会議の中で、これからどのような支援を、誰が、いつまで行うかを決め、支援シートに記入した。<br>○　学年会議で方針案を提示し、関係する職員に協力の要請をした。 | ここで支援シートを使った。<br>生徒の情報を係会議でまとめ、アセスメントを行った。<br>**担任と生徒のニーズを捉えながら情報の整理を行い、今後の対応をどのようにしていくか、検討することができた。**<br>SC のアドバイスをもらいながら方針案を立てた。<br>支援シートを担任に渡し、歩調を合わせて生徒に関わっていった。<br>学校不適応の生徒の居場所を確保するために、係が別室を用意した。 |
| **7　支援の開始**<br>支援シートに基づき、支援を開始した。<br>○　担任による生徒と親への支援を行った。<br>○　ＳＣによる定期的な生徒へのカウンセリングを行った。<br>○　教育相談係が連絡・調整役となった。 | 関係する職員(教科担任の先生や養護教諭、図書司書)へ働きかけを行い、別室にいる不適応生徒への指導をお願いした。 |
| **8　方針の再検討と実践の評価**<br>(1) 方針の再検討(コンサルテーション会議)<br>○　指導経過の中で出てきた問題点を、係会議の中で出し合うと共に、SC のアドバイスをもらいながら方針を再検討した。<br>(2) 実践の評価<br>○　これまで行ってきた支援や今後取り組みたいことを係会議で確認し、今後の援助で、誰が、何を、いつまで行うか、検討した。<br>(3) 継続した支援活動とチーム援助<br>○　継続的な担任への支援と、生徒への継続的な援助活動を行った。<br>○　学年会議で新たな方針案を提示し、関係する職員に協力の要請をした。<br>○　定期的な教育相談係会議の中で、他に不適応を示し始めている生徒をつかみ、その対応を検討していった。 | 定期的な係会議を開催し、その際、ピックアップされた生徒の指導経過を報告し、方針案に変更箇所や新たな事項があれば、支援シートに追加記入した。<br>進級に関わる単位認定については、管理職の考えが重要となるので、学年主任を通して管理職に確認をしてもらった。<br>管理職、学年主任、担任、教育相談係による関係者会議を開き、ピックアップされた生徒の問題状況と、問題の理解を行い、指導方針を検討した。**その際、授業に出られず、別室にいる際の指導方法や、欠課時数のオーバー分をどのように指導していくか、方向性を出し、教科担任に協力をお願いすることができた。**<br>教科担任も生徒に積極的に関わってもらうようにした。<br>援助を必要とする生徒が他にも出されたので、係会議で検討された。 |

## Ⅵ 研究のまとめと今後の課題

### 1 研究のまとめ

(1) 援助シートの作成について

○　生徒指導主事や教育相談係主任に相談しながら一連の援助シートを作成することによって、使い勝手の良いものができた。

○　目に見える形で援助シートを使用したことは、情報の共有化を図る上で有効であった。

○　援助シートを使うことによって、生徒のアセスメントがしやすくなった。

○　援助シートを使った会議を開くことによって、教育相談係の連携から他の職員も含めた「援助チーム」としての連携に発展させることができた。

○　援助シートを使った援助活動を、研究者が担当する学年だけでなく、他学年にも広げて実施したほうが良いとのアドバイスをもらい、他学年にも広げて実践ができた。

○　各学年の会議で、生徒の動向は従来から報告はされてきていたが、情報収集シートを使うことによって、気になる生徒の情報をすばやくキャッチし整理できるので有効であった。

○　生徒理解シートは、生徒のニーズを知る上でも有効なものであった。

○　教育相談シートを担任に書いてもらうことによって、担任の協力が得られた。

○　係会議の際に、教育相談係会議シートを使うことは、各学年から出された情報を共有し、整理するのに都合が良かった。また、援助を特に必要とする生徒の情報をまとめていくのに有効であった。

○　教育相談係が支援シートを会議の場で使うことによって、ピックアップされた生徒の情報がまとめられ、方針が立てやすくなった。

(2) 教育相談係会議の開催について

○　会議を定期的に行うことによって、相談室に来談する生徒の状況や保護者からの電話相談、保健室によく来る生徒の状況を逐一つかむことができ、学校不適応生徒の早期発見・早期対応が可能となった。

○　教育相談係と養護教諭、SC の連携が図れた。

○　誰がいつ、どのようにして動くかを、具体的に検討したことによって、その後の支援がスムーズにできた。

○　担任や学年の先生方から寄せられた情報を、係がファイルにまとめたことによって、情報の蓄積とその活用が効果的になった。

(3) 養護教諭と SC との連携による効果

○　悩みを抱えている生徒の保健室相談の情報を係がつかむことによって、その後の対応策が立てやすくなった。

○　教育相談係会議を開いたことによって、何らかの理由によって体の不調などを訴えている生徒の情報を、養護教諭から収集することができた。また、悩みを持つ生徒の情報を SC から収集することができ、その情報を基に担任と連携が取ることができた。

○　問題を抱えている担任が、生徒や保護者に SC を紹介し、連携を取るようになった。

○　SC が積極的に生徒や職員に近づいて情報収集をすることにより、教師との信頼関係が構築され、連携がスムーズにいくようになった。

○　教育相談係会議に SC が出席していたので、専門的な立場からアドバイスをいただくことができ、適切な対応ができたと共に、SC と歩調が合わせることができた。

○　SC から面談の報告を聞くことによって、SC から学ぶべきものが多くあった。

(4) 他の先生方との連携

○　関係者会議を開いたことによって、方針がしっかりと固まり、教科担任に協力のお願いができた。また、学年会議で指導経過の報告と方針を示したことによって、教科担任による指導が、単に課題を与えるだけの関わり方ではなく、その生徒の実態に応じた関わりをしてもらうのに有効であった。

(5) 全体に関わること

○　教育相談係(研究者)がコーディネート役として動いたことによって、情報がまとめられた。

○　校内の職員をつないで生かしていくのにコーディネーターが重要な役割を担うことが分かった。

○　これまでの係会議の機能に加え、ピックアップされた生徒への援助を検討する「援助会議」の機能を持たせることができた。

○　別室登校の生徒がいる部屋は、保健室と図書室の 2 室があるが、養護教諭と図書司書のそれぞれの関わりと、教育相談係との密な連携が、生徒の指導に大いに役立つことが分かった。

## 2　今後の課題

年度途中から会議を定期的に開催していくのにあたり、関係する職員がみな快く出席してくれたので、とても研究がやりやすかった。ただ、限られた時間でしかも放課後を使った会議であったために、会議をコーディネートするのが困難であった。来年度は、時間割の関係もあるが、授業時間中に会議を開くことができれば、SC が放課後、動きやすくなり、来談者に余裕を持って応じることができるであろう。また、集められた情報を共有化するだけでなく、方針を立てるには時間を要するし、管理職を含めた関係者会議を開催するのにも人数が増えることもあって、日程の調整に苦労することがあった。管理職の支援も含め、会議の持ち方に工夫する必要がある。

また、来年度、継続して SC が配置されれば、カウンセリングを望む生徒はあらかじめ手続きを取っておけば、授業を公欠扱いにする体制を作っていくことも検討してよいであろう。

さらに、家庭の支援が不可欠な場合、教育相談係の会議に保護者の参加を促し、保護者が家庭でできる指導・援助案を具体的に提供することも検討したい。

今回の研究は、様々なシートを使いながら会議に生かしていったが、学校の実態に応じてシートは変えていく必要はあろう。実際、参考文献中にあるシートをそのまま使おうとしてみたが、すぐに使えないことに気付いた経緯もある。

現代の生徒を取り巻く状況は複雑になってきており、これまでの教員の守備範囲を超える事例もますます増えていくものと思われる。教員がすべて背負い込むことは困難であり、教員も教育の専門家として、教員同士、あるいは外部の専門家と「連携」していかなければならないであろう。ただ、その際、「連携」という名のもとに、SC や教育相談係に問題が「丸投げ」されるようであってはならない。そうならないためにも、情報をしっかりとつかんだ上で整理していくコーディネート役を担う者が、中核となってコンサルテーションを行うことが大切である。

今年度、SC が配置された意味は大きかった。SC という外部の貴重なリソースを生かし、現場の教員と連携していくことによって、具体的な事例を積み重ねてシステム化していけば、たとえ SC の配置が終了したとしても、それを生かしていけるのではないだろうか。

また、非行や不登校、学業不振など、発生してしまった問題に事後的に対処するばかりではなく、すべての生徒がより良い学校生活を送れるようにする援助、いわゆる「予防・開発的教

育相談」について、教育相談係が主体的にそして積極的に推進していく必要があると思う。
　最後に、この実践を、年度途中から始めたため、困難な面がたくさんあったが、来年度以降も教育相談係が援助チームのコーディネーターを務め、組織化された教育相談活動を行うことで、校内の支援体制をさらに高めていきたい。

〈おもな参考文献〉


・ 福島　脩美　編著　『子どもをとりまく問題と教育⑮　教育相談による理解と対応』開隆堂出版（2003）
・ 堀内　聰・真仁田　昭　編著　『子どもをとりまく問題と教育⑦　不登校』開隆堂出版（2003）
・ 近藤　邦夫・志水　宏吉　編著　『学校臨床学への招待～教育現場への臨床的アプローチ～』嵯峨野書院（2002）
・ 平松　清志　編著　『学校教育相談の組織づくり』明治図書（1998）
・ 石隈　利紀･田村　節子　著　『チーム援助入門－学校心理学･実践編－』図書文化（2003）
・ 石隈　利紀　著　『学校心理学』誠信書房（2002）